こころの理解からケアを導く事例検討会

○小林　信[1,7]、須藤　公裕[2,7]、神澤　尚利[3,7]、寺岡　征太郎[4,7]、寺田　美樹[1,7]、則村　良[5,7]、田上　美千佳[6]

1東京医科大学医学部看護学科、2医療法人愛精会あいせい紀年病院、3東京都立大学健康福祉学部看護学科、4帝京大学医療技術学部看護学科、5医療法人財団青溪会駒木野病院、6千葉大学大学院看護学研究院、7精神看護ケア検討会事務局

本ワークショップでは、行動化をくりかえす患者さんのこころを理解し、そして、そこからケアを導き出す事例検討会を開催します。事例検討を通じて、行動化をくりかえす患者さんのこころの状態を、そのようなこころの状態に至るまでの情報を整理しつつ、理解を深め、こころの理解に基づくケアを共に考えることが本ワークショップの目的です。

行動化は、考えて言葉になって話されるはずの感情や欲求、葛藤が行動として表されることをいいます。本来、言葉として表現されるはずの感情や欲求が、さまざまな理由から言語化されにくい状態にあるとき、患者さんはそれらを暴力や自傷行為、過量服薬、逸脱行為等といった行動として表現することがあります。私たち援助者は患者さんのそのような行動を問題行動とレッテルを貼って捉え、その行動が繰り返されると、患者さんに怒りや諦め、無力感を抱き、ケアをすることが困難になることが少なくありません。そこには、患者さんがなぜそのような行動に至るのか、その背景やこころの動きを十分に捉えきれないことが根底にあるのではないでしょうか。

患者さんのこころを理解するためには、こころという形のないものを捉えるための枠組み（心を理解、認識するための理論や概念）が必要ですが、企画者らは事例検討という方法が有用と考えています。自分独りで考えて解決策が見つからなくても、複数人で事例検討をすることで、考えが整理されたり、新しい視点を見つけることができたりした体験は誰にでもあると思います。臨床経験や視点の異なる複数の看護師が、それぞれのこころの動きを手がかりに患者さんのこころについて話し合うことで、理解が偏ることなく、多面的に患者さんを理解することができます。企画者らはこれまで、患者さんのこころを理解することを大切にしながら、事例検討を重ねてきました。その経験の中で培われてきた、こころを理解するための情報の整理の視点や、事例検討の進め方に関する工夫を、ワークショップの中で参加者の皆さんと共有できればと考えています。皆さんがワークショップに参加することで患者さんのこころを理解する体験に加え、事例検討の方法についても共に学ぶ機会になればと考えています。本ワークショップは以下の構成で展開します。

【ワークショップの構成】

1）オープニング（趣旨の説明）
2）事例紹介
3）事例の理解とケアの検討
4）事例検討を通して得た気づきや思いの共有
5）クロージング（まとめ）

本ワークショップにおける倫理的配慮として、事例紹介となっている対象者から書面で事例提供の同意を得ます。そして、事例の情報が記載された資料は個人が特定されないように、本質が損なわれない程度で加工を施します。また、参加者には開始前に守秘義務に関する同意書への署名を求め、参加者が資料を持ち帰るのを禁止します。なお、ワークショップ中における録音や撮影も禁止し、参加者が安心して参加できるように配慮いたします。本ワークショップにおける利益相反はありません。

参加者の皆様が事例検討会を通して、行動化をくりかえす患者さんのこころを理解し、それをもとにケアを考えることができるように、企画者みんなでワークショップに取り組みますので、興味・関心のある方の参加をお待ちしています。